

<エッセイ>

ニューギニア高地エンガ州の纏れ合う自然と文化： 環境に遍在する「水分」と「心臓」

深川宏樹

18世紀末から19世紀中盤にかけて『ブリタニカ百科辞典』が描いた太平洋の南西島嶼地域(メラネシア地域)には、現地社会のコンテキストが欠けている。そこに透けて見えるのはイギリス、ひいては西欧列強による初期の植民地的領有の欲望であり、その細やかな視線は、地理把握や有用な天然資源にのみ注がれている¹。対照的に、その同じ記述から当該地域の地理や自然の内に住まう人々が実際に営んでいたであろう、社会生活や文化的なコンテキストを透かし見るのは困難である。19世紀後半にかかり、イギリスやフランスが本格的に植民地統治に乗り出すまで、そこに住まう者たちの社会生活や文化的性向などは、取るに足らぬものであったに違いない。ましてや、後に時代を下って文化人類学的な調査が明らかになっていく、地域文化の豊かでありながら複雑を極める観念体系や(西洋の予想を大きく裏切る)社会形態の細部など、端的に、不必要な過剰に過ぎなかった。自らの眼前にある対象のどこが有用であり、どこが不要であるのか。そのような視点から、対象をふるいにかけて、その有用性のみを掬い上げる態度は、植民地的領有というコンテキストにおいて、極めて顕著にならざるを得ない。世界を一举に俯瞰する疑似超越的な眼差しと、そのもとの知識収集は、対象を領有する旺盛な欲望に裏打ちされながらも、少なくともこの時期においては、実のところ限定的かつ狭隘な視野をその本分としていた。現地社会のコンテキストの欠如、そして自らの眼差しが置かれたコンテキストの無自覚が指摘されている²。

ここでは、筆者の文化人類学の研究蓄積に立脚し、パプアニューギニアの内陸高地(以下、ニューギニア高地)に位置するエンガ州において「現地の人々の視点から見た」自然と文化の纏れ合いについて記述する。すなわち、植民地的領有の観点から見た有用な地理や資源を記述するのではなく、当該地域を生きる人々にとっての「有用」な自然についての知識や、人々にとって知るに値する文化的な諸観念を記

述し、理解することを目指す。それゆえ、その記述は、ときに我々にとって過剰にも映る自然の細部や、容易には理解しがたい論理の道筋を辿ることになる。先述の植民地的領有の視点に反して、現地の社会や文化、そのもとに捉えられた自然は、(我々の視点から、ではなく)それ自体において価値をもつ、という文化人類学の信念が、それらの記述の基底を成している。

対象とする地域は、ニューギニア高地エンガ州のワペナマンダ地方に位置するサカ谷の村落であり、言語はエンガ語である³。生業は園耕農業で主食はサツマイモであり、豚の飼養もなされている。宗教は植民地期(1930年代から1975年)に導入されたキリスト教である⁴。サカ谷は四方を標高2,300mから3,500mの山々に囲まれており、それら山々の尾根がサカ谷と他地域の境界を成す。地形は概して山がちであるが、山々の尾根からサカ谷へと流れ込む河川の合流地帯には、比較的広い平地が広がる。

エンガ州サカ谷の自然観は、多岐にわたるが、そのなかでも焦点を当てるのは、自然の生命力と人間身体の生命力を貫く二つの原理である「水分」と「心臓」の民俗概念と、それを前提とした村人の社会生活実践である。

前者は、自然環境と人間身体の「水分循環説」とでも呼ぶべきものであり、そこにおいては木々や土壌の養分から身体の栄養素や活力が、エンガ語でイパンゲ(*ipange*)と呼ばれる「水分」により説明される。例えば、作物栽培に最も適した農耕地は水分の多い河川沿いの土地であるとされ、作物のなかでもとりわけ水分(=養分)を必要とするバナナやタロイモは、河川沿いの肥沃な地に栽培されることで大きく育つとされる。ただし、水分はその多寡のみならず、適度に流れていることが重視されるため、川沿いの耕作地には水の流れをつくる小堀が格子状にしつらえられる。同様に、身体はサツマイモ等の食物に含まれる水分(=栄養)を絶えず摂取することで、その健康が維持されるが、これも同様に、水分が流れずに多過ぎる場合には病が引き起こされるため、運動による発汗や、場合によっては瀉血により凝り固まった水分を適宜、体外に放出することが求められる(下痢も、そのように水分を体外に流す身体作用として捉えられている)。

さらに、動物のなかでも多くの水分を含むのは豚である。当該地域では、豚は単なる家畜ではなく、過剰なほどの水分を含む高栄養の食物であると同時に、(元来、耐久財が欠けていたため)最も価値のある交換財でもある。婚姻時に支払われる婚

資でもある豚は、村落の人々にとって必要不可欠な交換財であり、現金(公定通貨)が流通する現在においても、村人の平均月収が日本円で約 800 円ほどであるのに対し、大きく成長した豚の価格は、40,000 円を越える。

エンガ州では、この豚を多頭、育てることができ、親族・姻族の交換ネットワークを通して、必要な時に多くの豚を手元を集めることができる壮年男性に、社会生活の諸々の局面においてリーダーシップを発揮することが認められる⁵。このリーダーは、現地語でカモンゴ(*kamongo*)と呼ばれるが、この点に関しても、自然環境との類比的論理が働き、多量の水分を含んで伏流水を保持する、最も耕作に適した肥沃な土地も同様にカモンゴと呼ばれる。そのような肥沃な土地であるカモンゴが、水分の流れを一箇所に集めて還流させ、そこに植えられた作物に豊かな養分をもたらすように、村落のリーダーであるカモンゴは、その作物をふんだんに食べて肥えた多頭の豚を一手に集めては還流させ(繰り返し交換しパートナーシップを築きながら)、その男性の傘下に集まる人々に多大な財(≒水分)をもたらし、婚姻、戦争賠償、葬儀時の死者の母方親族への豚の支払いといった社会生活の基底部分を下支えするのである。

このように自然環境、人間の身体、家畜、そして社会生活の流れまでをも統一的に把握する原理のひとつが「水分循環説」であるとするならば、これとは別個の系を成しながら、植物や動物、人間の成長の原理として捉えられるのがエンガ語でモナ(*mona*)と呼ばれる「心臓」の民俗概念である⁶。モナは人の生存と結びつき、死は呼吸とモナの鼓動の停止によって確認される。さらに人に限らず、成長するものは全てモナをもつとされ、あらゆる動物と植物が内にモナをもつ。動物はその内にある「モナが大きく強くなる(*mona anda keto injingi*)」ことで成長し、子どもをつくれるが、「モナが悪くなる(*mona koesingi*)」と病に侵され死に至る。植物の場合、モナは幹や茎の中心にある軸である。動物の体を解剖すればモナ(心臓)を見ることができるよう、植物を切れば、断面からモナを見ることができる。植物はモナが水分で潤っている限り、成長して実をつける。だが、モナが乾いてしまうと植物は枯れてしまう。生きとし生けるあらゆる個はモナをもち、モナの状態変化に応じて、個の「身体」も変化していく。モナは個に変化を引き起こす力の源泉であり、このように見たとき、人間の身体を越えて、自然に生命原理としての「心臓」が遍在している。あるいは自然の内に遍在する植物の生成消滅の「軸」が動物や人間の身体の中核にも見いだされる、と捉えることもできる。

ただし、「水分循環説」においては自然環境と人間身体が連続的に把握され、そこからの類比により社会生活が整序して捉えられていたのに対し、「心臓」の民俗概念と社会生活の関わりは、自然(土壌や植物)との類比を越え出る側面をもつ。なぜなら、基本的に、植物や動物のモナの状態は、その生命体内の水分の多寡により左右されるが、それに対して、人間のモナの状態は、水分の多寡に加え、個々人の感情の状態により左右されるからである。正確には、人間の場合、「思考や感情(*masingi*)」それ自体が、モナの状態であり、例えば不満、怒り、妬みなどは「悪いモナ(*mona koo*)」と総称されるのに対して、満足、好意、喜びなどは「良いモナ(*mona ep*)」と表現される。したがって、人の身体は肯定的な感情、すなわち良いモナによって健康を保ち、成長し、子どもをつくれるのに対して、否定的な感情、すなわち悪いモナのために病にかかり死ぬことさえある。例えば、土地争いの只中にある者は多くを悩むため、不眠となり、食欲がうせて痩せ細り、皮膚が乾燥し満足に働くこともできなくなる。なお、この点に関して、他の動物については曖昧であり、豚が思考や感情を持つかどうかは「知りようがない」とされるが、鳥インフルエンザに関しては、人間が鶏を食べ過ぎるために彼ら／彼女らが悩みを抱えたせいではないか、と疑われていた。

感情がモナの状態であり、身体の成長や健康に直結するとする観念は、社会生活の対他的状況に、エンガ特有の自己への配慮が差しはさまれることになる。ここでは健全なる精神は健全なる身体に宿るというより、むしろ健全なる身体は健全なる社会関係に宿り、身体＝自然＝社会生活ともいべき単一の過程が想定されている。社会性は自然の身体と別個に存在するのではなく、身体に社会性が内在している。

以上、こうした「水分」と「心臓」といった複数の文化的な観念を把握し、それを取り巻く社会的実践のコンテクストを積み重ねて民族の知を腑分けしていく方法は、文化人類学の常套手段ではある。このような重層的コンテクストへの執着と、ともすれば離散的な方向へと拡散しさえする細部への徹底した拘りこそが、他者への支配の欲望を消滅させるものであること、世界を疑似超越的な視点から一手に掌握することを夢見る知識収集とは異なる、他なる／多なる自然・文化の理解へとつながることを主張しておきたい。

-
- ¹ この点に関しては、たとえば *Encyclopedia Britannica*, 8th ed. vol. 3, Boston, 1853. の “Asia” の項, pp.729-757、等を参照のこと。
- ² 植地的領有を背景とした知識収集の文脈での「記述」における、現地社会のコンテキストの欠如や、自らの眼差しが置かれたコンテキストの無自覚に関しては、浜本満の博物学に関する論考(浜本満 2005 「ファーストコンタクト再演—博物学と人類学の間」太田好信・浜本満編『メイキング文化人類学』世界思想社, pp.15-37)がある。
- ³ 本論で提示する資料は主に 2007 年 5 月から 2009 年 1 月にかけてニューギニア高地エンガ州ワペナマンダ地方 (Wapenamanda District) サカ谷 (Tsaka Valley) M 村にて行った実地調査に基づく。当時のエンガ州の人口は 295,031 人、ワペナマンダ地方は 53,547 人、サカ谷は 15,604 人、M 村は 1,303 人であった (Papua New Guinea National Statistical Office 2000)。言語はエンガ州のほとんどの地域で使用されるエンガ語である。
- ⁴ エンガ州では、1940 年代後半から 1970 年代までの間に、カトリック (Roman Catholic)、ルター一派 (Lutheran)、安息日再臨派 (Seventh Day Adventist) に、カトリック使徒派 (Catholic Apostolic) とバプテスト派 (Baptist) を加えた、5 つの宗派が布教活動をしており、とくに前者 3 つが主な宗派となっていた。
- ⁵ エンガ州におけるリーダーシップとその変容に関する民族誌的記述の詳細と考察については、筆者の論考(深川宏樹 2011「サブスタンスと交換による親族関係の構築—ニューギニア高地における葬儀時の母方親族への贈与の事例から」『文化人類学研究』12 巻, pp. 90-112; 深川宏樹 2018「紛争の「重み」、感情の仲裁—ニューギニア高地エンガ州サカ谷の事例から」『文化人類学』82 巻 4 号, pp. 526- 546)を参照のこと。
- ⁶ エンガ州における「心臓」の概念に関する民族誌的記述の詳細と考察については、筆者の論考(深川宏樹 2016「身体に内在する社会性と「人格の拡大」—ニューギニア高地エンガ州サカ谷における血縁者の死の重み」『文化人類学』81 巻 1 号, pp. 5-25; 深川宏樹 2017「狂気に突き動かされる社会—ニューギニア高地エンガ州における交換と「賭けられた生」」風間計博編『交錯と共生の人類学—オセアニアにおけるマイノリティと主流社会』ナカニシヤ出版, pp. 267-297)を参照のこと。

